

南芦屋浜ビーチコーミング

谷口 新

小さな小さなウニの存在を知り京都の琴引浜まで採集に出かけ潮間ラインの上や打ち上げられた海草の陰だろうかと考えながらたった1つずつですがコメツブウニとマメウニを見つけました。小さいけど殻表にはきちんと五角形模様が描かれ、殻裏には口と肛門が並んだ繊細な作りです。ただしもう少しちょっと近場で採集できないかと探すうち淡路島の西側多賀海水浴場で見つけ次いで淡路島東側の東浦でも見つけそしてとうとう南芦屋浜でも見つけてしまいました。南芦屋浜は散歩がてら行ける所にあるので春夏秋冬朝でも晩でも行きたい放題です。でも行ってみてわかったことですが大潮を考慮しないと徒労に終わります。ビーチコーミングは海が荒れる冬場で、人が少ない平日の干潮時が適しています。夏から秋にかけて台風の後はいろんなものが打ち上げられていて大変興味深いです。暗くなってから懐中電灯を持って波打ち際をうろうろしていると怪しまれます。浜辺にカップルなんかいたらお互い大変迷惑です。そしてここは佐賀県唐津から砂を持ってきて造成した人工海岸。(芦屋市都市環境部環境課発行に詳しい)唐津産と思われる貝類を始め外肛動物、刺胞動物、サンゴコケムシの仲間などが見られます。そこに六甲山から急流を流されてきたアズキガイ、キセルガイなどの陸貝と芦屋川汽水域産か?ヤマトシジミ、マシジミの若い個体も打ち上げられています。コメツブウニ、マメウニなどの棘皮動物は2015年10月12日芦屋浜で大量打ち上げがありました。1mmもない小さなものから10mmほどの成体まで見られ棘の残ったものも見られたことから南芦屋浜でも繁殖しているものと考えられます。海底を転がされてほとんど全部のコメツブウニ、マメウニが棘のない状態で打ち上げられます。丸くて小さくて軽いので日に照らされて乾燥すると風で簡単に吹き飛ばされてしまいます。おまけにちょっと力を加えると簡単に粉々になって消えてしまいます。浜辺で拾い集めていると「何を拾っているんですか?」と多くの方に声をかけられます。「小さなウニを拾っているんです。」「食べられるんですか?」「食べられません。」「あー、そうなんですか…」でいたい会話は終わってしまいます。でも私にとっては他のウニ同様とても興味深いものなんです。2015年に限ってはコメツブウニに殻の腹部が大きく凹んだものが少なからず見られ大量発生による生育不良を原因とした変形ではないか、そうだとする小型化するのではなく体積を減らしても殻の表面積を増やし大型化する意味を調べてみたいと思います。

2016年春には浮遊性のカメガイの大量打ち上げがありました。南芦屋浜で打ち上げられるバフンウニ、ムラサキウニが全て5mmに満たないのはウニの生育条件に合わずそれ以上成長出来ないものと思われます。南芦屋浜産として生体のはっきり確認されるのはアサリ、イワガキなどの二枚貝など。

冬場西風が吹くころ南芦屋浜にオニビシ、ヒメビシ、ヒシ、トウビシなどが打ち上げられます。これは芦屋より西側の湖沼でのヒシの生育を意味しています。栄養価の高いと言われるヒシの栽培をする産業が成り立たないかなどと考えています。

どこの浜でも見られる波打ち際の砂鉄は南芦屋浜でもしっかり集まっています。南芦屋浜の砂鉄は唐津産かもしれませんが自然の浜辺が存在したころはあちこちの砂浜で黒々とした砂鉄の集積が見られたと思われます。古代の鉄は海を渡って大陸から日本に伝わったと言われていたのですがその後この瀬戸内でこの砂鉄を採集利用した痕跡が発見されないものか期待しています。(海砂鉄は精錬には向かないという事実はあるようです。)

この標本を作成するきっかけとなったコメツブウニ、マメウニを中ほどに配置しています。対象が細かいのでビンに入れて並べるという形をとり15世紀~18世紀ヨーロッパで作られていた博物陳列室(驚異の部屋)ヴンダーカンマー(wunder kammer)をイメージしてみました。科学分類学の発達によりその考え方は廃れましたがコレクションのいくつかは今日の博物館の前身になったようです。ちなみに大英博物館はハンス・スローン卿の収集物を基にして作られているそうです。